

令和5年度第2回 大分県文化振興県民会議 議事録

令和6年2月13日(火) 14:00~16:00

大分県庁新館5階 51会議室

■議題1 iichiko 総合文化センターのリニューアルオープン及び

OPAM10周年を契機とした芸術文化のさらなる振興について

○芸術文化のさらなる振興のために一番大切なことは、自分で考えることができる人間を育てていくことであり、それができれば自然と盛り上がっていくと思う。短期的なイベントなども必要だが、子どもたちを取り巻く環境そのものを変える仕組みをつくっていかないといけない。

○大分には雨の日に子どもたちが楽しむことができる場所がほとんどないので、OPAMがそういった場所になるとうれしい。展覧会のときも子どもの居場所がないので、例えば、絵本や遊具があったり、いつでも自由に何かつくれるようにアトリエを常時開放していたりすると、雨の日は美術館に行こうかとなると思う。

○新しい展覧会や企画を考えることも大事だが、今あるものをブラッシュアップして内容を充実していくことの方が、長期的にみると大切ではないかと思っている。例えば「高山辰雄展」や「大分七夕まつり」は大分の人にはみんな知っているが、毎年同じような開催方法になっているので、もっと工夫できるのではと感じている。大分ならではの手法や大分でしか見ることができないものといった要素を加えていけば、全国的にも世界的にもPRできる。こうした取組を通じて、みんなの日常のなかにアートが浸透していき、子どもの頃から自然と美術や芸術を感じるようになると思う。

○県立総合文化センターは大分を代表する文化施設であり、グランシアタの女性用トイレの拡充は、機能性や利便性という観点からだけではなく、大分県のブランドイメージの向上にもつながると思う。百貨店等を見ても、女性用トイレは集客力アップのための大きな要素になっているので、継続して改善に取り組んでいただきたい。

○iichiko 総合文化センターの地下練習室については、もっと周知が必要だと思う。あわせて、利用料金について、例えば年間会員のような割引制度やいつも使っていただいている方に対して何かメリットがある仕組みがあれば、さらに利用者が増えると思うので検討していただきたい。

○海外の美術館などでは、一般の来館者が館内で自由にデッサンしている姿を目にするが、国内ではあまり見かけない。防犯上の問題もあると思うが、例えばOPAM3階の展示室

で福田平八郎先生の作品をガラスケースの中に展示して、子どもたちにそれをスケッチしてもらいようなことができれば、とても生きた授業になると思うので、こういったことも検討してはどうか。

○OPAMはもうすぐ10年になるが、最近の企画はバラエティに富んでいて、随分と気楽に立ち寄れる場になってきたなと感じており、県民に親しまれるという意味では、とてもよいことだと思う。一方で、1階アトリウムの西側や2階会議室前など、今一つ有効活用できていないスペースもある。また駐車場についても料金やサービスについて検討が必要ではないか。もっと利用者の声を聞きながら、できるところから改善に取り組んでいきたい。

○グランシアタや音の泉ホールなどにおいて、子どもたちにどんなことをやるのか企画から任せてみてもおもしろいのかなと思う。OPAMであれば子どもたちに作品展のようなものを企画させてみるとか。当然大人のサポートも必要になるが、子どもたち主体で運営するという体験をさせることで、これまでとは違う視点で芸術に触れることができるのではと思う。また、子どもたちだけではなく、小中学校の先生向けのワークショップなども企画していただけるとありがたい。

○OPAM美術部やアウトリーチ活動など素晴らしい取組をされているので、もっと広報して多くの人に知ってもらうことが大切だと思う。一方で、もうちょっと気軽に参加できるもの、いつ行っても体験できるものというものもあればいいと思う。また、若者向け、特に学生向けのPRをもっと意識してほしい。例えば、iichiko 総合文化センターの公演における25歳以下の割引等についてももっとPRして、学生にも足を運んでもらえるようになればいいと思う。

○美術館の使命として、第一には、文化遺産の収蔵と継承、調査研究といった地道なことを続けていくことが重要で、こういったことの意義や価値を成果として発信していくことが大切だと思う。第二点は、芸術文化に関わる人たち、鑑賞者層の拡大で、そのために、情報発信の方法や学校、企業等の団体鑑賞の促進についても検討していただきたい。三点目として施設のサービス強化、利便性の向上も必要。外向けに華々しい事業を実施して耳目を集めるようなことも大切だが、やはり底辺の拡大、基盤整備といったことも大切にしていきたい。

○ホールの音響は素晴らしくアーティストからの評判もよい。来年度は、ウィーン少年合唱団や英国近衛軍楽隊、ドイツカンマーフィル交響楽団など海外からの公演も計画されているが、福岡などは本当に海外から多くの方を招いているので、大分にもどんどん海外からオーケストラなどと呼んでいただきたい。

■議題2 大分県新長期総合計画（芸術文化分野）の素々案について

- 若手作家の育成に関して何か記載があるとうれしいと思う。子どもたちの支援、質の高い展示、発表機会の充実とあるが、若手作家の育成が加わると、大分のなかで一本の流れができるのかなと思っている。県立美術館に作品を購入してもらうことができれば作家にとって大きなアピールポイントになるし、また、作品の文脈的な意味まで理解してもらえるような学芸員さんがさらに増えていくことで、美術館と作家がウィンウィンの関係を築けるようになる。ぜひ若手作家育成の取組に対してもっと力を入れていただきたい。
- 子どもたちにもっと芸術文化に触れてもらうため、大分県教職員組合の互助会と連携した「子ども芸術クーポン」制度の新設や県内の小学4～6年生を対象に、年に1回は芸術鑑賞という名目でOPAMに招待し、バス代を県が負担するという事業を検討してはどうか。
- 県内全てのホールで開催されるイベントに少しでも補助があるとありがたい。また、芸術文化スポーツ振興財団が所管する「大分県芸術文化友の会」会員に対して、有料でもよいので、県内の他団体が主催するイベントのチラシを配布してもらえるとPRの機会が増えてうれしい。
- 障がい者芸術文化支援センターの立場として、情報アクセシビリティの向上がとても重要だと考えている。例えば、目が不自由な方に対してユニボイス（読み上げ機能）が付いたものを送付したとしても、ユニボイスがどこに付いているのかが伝わらないと活用できないし、テキスト形式で送付しても点字でなければ読めない人もいる。様々な手法で情報の提供をしなければいけないと強く感じており、難しいところもあるが、できることから取組を進めていきたい。
- イベントを企画・主催する立場としては、まずは多くの人に来てもらうことが第一であり、そういった面では、県民に情報を届けるための広報のあり方については、新聞も含めたメディアをもっと有効活用するなど、まだまだ改善の余地があるのではないかと。
- 美術館については、せめて週末だけでも館内にキッズスペースがあればということ強く感じている。親としても子どもに芸術に触れてほしいという思いはみんな持っていると思うので、色々と制約はあるだろうが、ぜひ検討していただきたい。
- 少子化は切実な問題で、今の子どもたちは本当に忙しくて芸術を浸透させるというようなことはとても難しい。ユーチューブで自分の気に入ったものだけを見ているような状況で、子どもたちが生活の中で広く文化に触れるというようなことがあまりないのかなと感じている。例えば、気軽に参加できるワークショップを充実させるなど、できるだけ芸術に対する敷居を低くして、色々なことに触れることができる機会が増えるといいなと考えている。

- OPAMについて、たしかに多くの人に来てもらう間口が広い取組というのも大切であり、それが基本でいいと思うが、ときには、なんだかよく分からないなという企画もぜひあってほしい。芸術文化というのは、我々の今までの感性、ものの見方や考え方、固定観念というものを広げてくれたり壊してくれたりする役割もあると思う。ときには、そうした企画もあるとうれしいなと思う。
- カルチャーツーリズムの取組をウェブサイトで発信する際に常々感じているのは、OPAMが一つの入口になれないのかなということ。芸術文化スポーツ振興課が運営している「大分アート&カルチャー」というウェブサイトがあるが、ここで県内の様々な情報を集約して、多くの人たちがここをみれば必要な情報を得ることができ、ゆくゆくは MaaS みたいに交通チケットの手配までできれば最高だなと考えている。もっと有機的に連携できる仕組みを考えるとよいのではと思う。
- 厳しい言い方をすると、今後10年間の計画の中に危機感が少ないと思う。今までの10年間とこれから先の10年間は全く違う。新しい計画も今までの計画を踏襲したものになっているので、これでやっていけるのかなという気がしてならない。アルゲリッチ音楽祭についても、10年後はアルゲリッチはいるか分からないし、アルゲリッチという名前が県外から人を呼び込むコンテンツになり得るのかも分からない。その辺の危機感というものが、全体的に足りないのではないか。
- 人口減少、少子化が大きな問題で、今OPAMに来ている団塊の世代が動かなくなってしまう。今までのように、実際に大分市まで来て芸術文化を鑑賞して買い物をして帰るといったようなパターンがなくなってしまう。そういう危機感を持つ必要があると思う。人間が動かなくなったら芸術文化を動かす、芸術文化を持って回るということを考えないといけない。これまでも色々な取組をしてきたが、人が動かなくなった地域にどれだけのものを持って行けるのか、どうするかたちで持って行くのか、そういう議論ももっと必要ではないか。また、少子化が進むなかで、子どもたちの人間性をどのように育成していくのか、日本の文化、日本人が育んできた文化を本当に継承していけるのか、どう守っていくのかという議論がもっと必要だと思う。